

キミコ・プラン・ドウ 20周年に向けて —変わらないことと、変わってきたこと—

いつも、キミ子方式に関心を持って下さり、また、おつきあい下さってありがとうございます。

実は今年2009年は、キミコ・プラン・ドウを開設して20周年の年になります。だからといって、これといったイベントをするつもりもなかったのですが、せっかくだから、今までの事を振り返りながら、20年目になる今年だからできることをしていこうと、決意も新たに進んでいこうと考えています。少し長い文章になるかもしれませんが、少々おつきあいいただければ嬉しいです。

◎10年前に書いた〈挨拶文〉

1999年5月4日(祝)に、キミコ・プラン・ドウ10周年パーティーを、目黒区駒場にある〈駒場エミナース〉で行いました。当日は参加者のスピーチあり、ゲストはキミ子さんの古くからの友人である、俳優の山谷初男さんが唄を披露してくれました。

そのパーティーで配布された小冊子の中に、キミコ・プラン・ドウを立ち上げた3人、キミ子さん、川合京子さん、そしてボク松本一郎が、10年目の想いを書いています。

●文字が書ける人の数だけ、絵が描ける人を・・・松本キミ子

1989年5月、机と椅子もなく生徒は誰もいない教室。床がピカピカに光っている。隣の東大／先端技術センターの森からやわらかな光がもれる。5月の風もさわやかだ。でも、大家さんのセリフがちらつく「ここは人通りが少ないから・・・どんな商売をしても上手くいかない」と。

拭き掃除が終わったら、昔の仲間が持ってきてくれた赤飯を食べる。「3年もつといいなあー、3年以内に撤退したら保証金200万円返ってこないなあー」

机とイスが教室に運びこまれて、少し教室らしくなった。オープン記念に大きな花束が大家さんからプレゼントされた。近所の人がある。「あの一、美容院かなにかですか?」「何の商売?」「絵、売っているんですか?」と訊かれた。その上、私の不安をあおるように「お花とか踊りの教室に貸したらどう?」「家元制にしなくちゃだめですよ」などなどのセリフを訊きながら、「部屋、机、イス、お茶、トイレがあるのだから、近所の河合塾の自習部屋にレンタルしようかな」と、私はあくまでも悲観的だった。

オープン記念展覧会は、榎本信次郎個展。講師は私、川合京子、松本一郎。キミ子方式が何よりも好きな3人。

画用紙が足りなくなったら、いつでも足せる量の画用紙があって、絵の具があって、時間が延びても追い出される心配のない教室。そして〈キミ子方式のお問い合わせはココ〉と明記できる事務所が嬉しかった。

「文字が書ける人の数だけ、絵が描ける人をふやしたい」「ひとりでも多くの人を、絵

が描けないコンプレックスから解放してあげたいなあー」とやってきて10年。さて、実現しているのかなあー。

一点からとなりとなりといくだけだけど。

●印象深い2つのこと・・・川合京子

1987年のある日、いつものようにフラリとキミ子さんの家に行ったら、キミ子さんが台所で忙しく料理していた。出版社の人とキミ子さんの友人がいたけれど、いつも誰かがいるキミ子宅ではめずらしくなかった。でも、あの夜はすごいご馳走だったから、私はなんでもかなあと思ったことを覚えている。そして、キミ子さんにご馳走が似合わないと思った。

実はあの夜「キミ子方式」の会社を作る会議だったことを、あとからキミ子さんに聞いた。株式会社だから7人の役員が必要らしいことも。その中に私が入っていることも初めて知った。私は、だからあんなにご馳走だったのかと納得した。キミ子さんがあわただしかったのは緊張していたからだ。あんなキミ子さんを見たことなかったから、台所に立つキミ子さんの後ろ姿をよく覚えている。

もう一つ、何時だったか覚えてないけど、感動したことだけは覚えていることがある。

キミ子さんが言った「京子ちゃん、絵の描き方の本を出したんだから、質問に答えなくちゃ無責任だと思うのよ。キミ子方式のことなら何でもお答えできなくちゃ。だから、場所と答える人が欲しい」。私は素直に感動した。すごいなあー、そんなこと考えているのか、料理の本には「質問にお答えします」なんて、ないもんなあーと思った。

それからしばらくして、株式会社ではなく有限会社になると聞いた。既に役員3人は決まっていて、キミ子さん、一郎さん、そして私だった。自分のすぐ隣にいる一郎さんと隣の隣に住んでいた私だ。

キミコ・プラン・ドウを始めるときには意識していなかったけど、結局、キミ子さんは確実に触って確かめられるもの「となり」だけを信じているのかもしれない。

毎年のように今後のキミコ・プラン・ドウについて話をする。すれ違いの3人が話をするのは決まって春だ。それも展示会の頃。3人とも口が達者だから議論になるけど、私はいつもこの印象深い2つのことを思い出して、私が感動した「お答えの場」になっているのかと考える。

今年は10周年。振り向けば・・・いろいろなことがあった。キミ子さんの名セリフに「過去は振り向かない」があるけど、様々な出来事と入退院を何度も繰り返してきた私としては、今の平穏無事な生活を幸せだなーと実感する。前に進むだけじゃなくて、たまにはちょっと過去も振り向いて、それからまた、今日一日、そして明日へ向かえばいいと思う。

何よりもみんなが元気なこと、それが一番だと思うから。

●変わらないって大事なことだと思う・・・松本一郎

今日、4月29日(祝日なんだと、昨晚、遅い時間なのに妙に元気な長男の健太をみてはじめて気づいた)、〈80歳の母が絵を描いた一あれから5年一展〉の初日。(この展覧会をしたいなあと思っていて、道端でバッタリ会った平福美恵さんに『一あれから5年展一をしましょうよ』と話したら、ステキな笑顔でうなずいてくれて、絶対やらなきゃと決意してしまった)

昨日、この展覧会の搬入も終わり、机に戻るとキミ子さんからの原稿がファックスで届いていた。『ビギニングニュース』最新号の原稿だ。

その原稿を一通り読み、ヘラヘラ笑いながら、相変わらずのキミ子節に気を良くして、ワープロに打ち始める。そこへ健太から夕食のお誘いの電話が鳴った。急いで原稿を打ち終え、キミ子宅にファックスで送り、家に戻る。その後、夜も更けてからキミ子宅に行き、原稿の校正を打ち合わせて、また事務所に戻りニュースを作る。なんやかんやと手直しして、印刷までやろうかなあと思っていると丑三つ時を過ぎているので、明日、印刷することにして家に帰った。

今日は、朝からひとり、またひとりと〈80代の母たち6人の作品〉を見に来てくれる。先週の毎日新聞の記事を見て、作品展を観に来て下さった方たちだ。

ニュースを印刷しようと思っていたが、たくさんの方が作品展に来て下さったので、その対応に追われて作業するタイミングを失う。陽の沈んだ頃、印刷を終え、印刷した2枚の紙を半分に追って組み始める。そしてニュースが出来上がっていく。

その作業の合間にフト前を見ると、PCに向かって10周年パーティーで配る冊子を川合京子が一人ブツブツ言いながら作っている。夜になるとボクも川合もだんだん元気になるのだ。

ニュースも組み終わり、明日発送するために封筒に入れやすいように、ニュースの三つ折り作業を始める。

斜め前の机を見ると、キミさんは机につぶして寝ているようだ。

10年前のキミコ・プラン・ドウ開設当時と変わらない風景が目の前で展開している。

ボクと川合は、典型的な夜型。そして、キミさんは日の出と共に目を覚ます朝型。こんなにも生活習慣の違う3人、シロウト衆が一つの事業を始めた。

キミコ・プラン・ドウを始める時に、もって3年だろうと思っていた。その時3人で〈やると決めて始めるのだけど、終わる時はどうしようかも考えておこう〉と話し合った。そして明確な答えを見つけられないまま今に至っている。

10年目を迎えた。たかだか人生33年しか過ごしていないボクが、ひとつのことを10年続けている。(義務教育の9年でさえ、まともに続けられなかったのに)。これまで生きてきた中で一つのことをこんなに長く続けたことはなかった。最長記録だ。

でも、これが楽しいんだよなあ、人の笑顔を見ることが。

たくさん笑顔に支えられて、日々淡々を過ごして来た。何の目標もなく、何の展開もなく、ただ、終わったことにはこだわらず(だから、お世話になった人たちにメイワ

クかけっぱなし)、大きな目標を掲げず(だから身近な人にはメイワクかけっぱなし)。

これこそ、過去は振り向かない／先を考えない。

そして、この冊子が配られるパーティーの席で、たくさんの笑顔にふれ、きっと明日もワクワクと、笑顔に出会えることを夢見て、ちょっと先へ進んでいく……。

「キミ子方式」を通して出会った方々、いいかげんなボクを支えてくれるスタッフのみんな、そして、気弱なボクを元気づけてくれる家族と、無二の親友K君へ。

〈いつもありがとう。これからもよろしく〉

これが10年前に書いた文章です。開設からこれまでの20年で、変わらないところと、大きく変革したところが見えてきました。

◎変わったところ —キミ子方式の広がり—

キミ子さんが書かれた文章にもありますが、開設当初は生徒さんが来てくれるのだからかと、不安でした。開設1年目の年度末に開催した、第一回「私にも描けました展」の出品者は、28名。1990年春のことです。

元々、1975年にキミ子さんが産休補助教員として、小中学校で図画工作を教えている時に、クラスの一番苦手な子に焦点をあてて、今までの絵の描き方を覆す「キミ子方式」をまとめ、教育界に投げかけました。

その当時たった一人の支援者に後押しされて記録に残し、その記録が、仮説実験授業研究会を主宰している板倉聖宣さんの目に止まり、その研究会の会員が実践してくださって、理論を深めていきました。

1982年、初めての共著『絵のかけない子は私の教師』（仮説社）『三原色の絵の工具箱』全3巻（ほるぷ出版）が時期を同じくして出版されます。その本は画一的だった美術教育に新風を巻き起こし、絵が苦手な小学校の先生を中心に広がりはじめ、人々に伝わり、33年経ちました。

1989年5月、東京都目黒区にキミコ・プラン・ドウを開設して、20年後の今日現在、アートスクール18名 駒場クラス5月生175名 9月生61名 通信講座生32名。

この春に開催する「私にも描けました展」は、3つのグループに分けて、出品者175名になりました。第一回から比較すると6倍強の生徒増加です。そして、2008年度に企画したイベントに参加した方は累計で400名を超えます。これは、予想を超えた広がりです。

・キミ子方式を教える人が加入する「キミ子塾」スタート

駒場での講座だけでなく、全国でキミ子方式を伝えて下さっている方を対象に、2000年4月から、キミ子方式を教えている人が加入する「キミ子塾」を立ち上げました。

それまでキミ子方式を伝えること／教えることはフリーでした。キミ子方式で絵を描き、その楽しさをとなりの人に伝えて広がってきたキミ子方式ですから、それは当然のこととして、キミ子さんがキミ子方式を考えた1975年当初からそのスタイルを通して

ました。

しかし、広く実践されるようになり、キミ子方式が知られると「キミ子方式を教えます」と言う側の意識の違いが内容の差になってきてしまいます。

キミ子方式を長く学び、ウチの企画するセミナーに参加し研鑽を積んでいる人と、本屋でキミ子さんの著書を立ち読みしてキミ子方式を教えている人が、同じ「キミ子方式を教えます」と掲げても、対外的には内容がわからないのです。

また、事務所にも、直接的な苦情じゃないけれど、内容についての問い合わせがくることもありました。そのために、キミ子方式を教えるのには「キミ子塾の入塾が条件」と、全国で教えているだろう方、250名に通知させていただき、150名強の方からお返事を頂戴し、50名の方が「キミ子塾」に入塾して下さいました。

現在、キミ子塾に入塾し、キミ子方式を教えている方は、北海道から沖縄まで、58名。10年の間には、入塾する方、お休みなさる方などの変動はありますが、その方々が教えて下さっている生徒さんは合計で1300名以上になります。

2000年4月から、松本キミ子が北海道旭川市にある、拓殖短期大学保育科の教授として勤め始めました。そのために全国を廻ってキミ子方式を伝えられなくなっていきます。そのタイミングでキミ子塾が出来て、教えている方とつながっていけることは、キミ子さんにとっても嬉しいことでした。

・キミ子方式海外研究実践チームの活動

また、日本国内だけではなく、1995年に中国／北京で開催された〈世界女性会議〉に出席したキミ子さんは、そこでキミ子方式のワークショップをするなかで知り合ったトンガ王国の方と意気投合し、翌年1996年、キミ子方式海外実践研究チームを立ち上げ、たくさんの方からの寄付でトンガ王国での実践を実現することができました。

それからは、世界中の〈三原色の国旗の国〉に、キミ子方式を教えにいかうと実践を続けてきました。コロンビア、メキシコ、キューバ、韓国、チャド、グアテマラ、フランス、ルーマニア、フィリピン、モンゴルなどの国で、その国の養護施設や大学、小中学校や教育関係者が集まる場所で、キミ子方式で絵を描いてもらっています。

昨年、2008年には、韓国・晋州（チンジュ）にある、晋州教育大学で、同大学の美術科教授であるユン・サンウン氏が中心となって、現地の教員や大学生などが講師を努め、日韓交流大会を開催することが出来ました。その後も、ユン先生がキミ子方式のテキスト本を出版することもできて、ジワジワとですが、韓国にもキミ子方式が広がりつつあります。

◎キミ子方式の広がり比べて、変わらないこと

キミ子方式の全国の広がり比べて、開設当初から変わらないこと、それは一貫してキミ子方式の根底を支える視点「できない人から学ぶ」に尽きます。

この視点をいつでも変わらずに持ち続けてきたという自信はあります。そして一人で

も多くの方に、絵を描く楽しみを知ってもらいたいという気持ちはこれからも変わりません。

2000年5月から足かけ5年間、月刊誌『We』（フェミックス）で連載をしていました。その中で2001年2月号に「来てくれてありがとう」と題して、こんな文章を書いています。

●来てくれてありがとう

子どもの頃、ボクが育った家族のあり方が、世間から遠くにあったため、小学校に通いだしてから親の考え方と学校の先生の考え方との差にとまどいを感じながら過ごしていた。自分が自分らしくあるためには、先生の望む方向についていくことに疲れていった。だからという訳ではないけれど、学校を休みがちになり、学校は学校、自分は自分と分けて考えるようになっていった。

キミ子方式を教えることを仕事にし始めた頃、奥地圭子さんの主宰する〈東京シューレ〉（不登校の子が集まるフリースクール）にキミ子方式を教えに行くようになったのも、必然だったような気がする。

その講座で、秋に〈ブドウ〉を描いた。講座が終わりに近づき、参加してくれた子みんなが、ステキなブドウを描き終わって、モデルのブドウを食べていた。

夕方から始まる講座なので、描き終わって家路につく頃には、外は暗くなっている。

「一郎さん、またねー」

帰っていく子、一人一人声をかけてくれる。ブドウを食べながら、

「うん、じゃまたね。気をつけて帰ってね」と答えていた。

「じゃ、またね」と一人の男の子が声をかけてくれた。それに答えて、

「今日は来てくれてありがとう。また来月会いましょうね」と声をかけたら、ボクのとなりでブドウを食べていた絵里子ちゃんが、

「一郎さんて商売うまいよなあ。普通、生徒に向かって〈来てくれてありがとう〉なんて言わないぜ」と軽く話しかけてきた。

そう言われたボクは、内心〈言い方がいやらしかったかな〉と思いながらも、なにも言わないのもヘンかなと思って、自分が今やっている他の講座のことを思い出しながら絵里子ちゃんに話しかけた。

「ボクは、ココみたいに呼ばれて講座をすることもあるけれど、自分で人を集めて公民館やイベントホールの会場を借りて講座をすることもあるでしょ。そういうところは、ココみたいにすぐ絵を描くようになってないから、画用紙やモデルや道具を自分で運んで、講座の始まる時間の前に部屋のカギをもらって、掃除して、机を並べて、生徒さんが来たら絵が描けるように準備するんだよ。

その準備が終わって、生徒さんが来るのを待っているじゃない。それが、たまたまみんな用事やなんかで、一人も来ないことってあるんだ。

開始時間から 30 分くらいたって、〈もしかしたら、誰も来ないかもしれないなあ〉と思うんだけど、結局講座の終わる時間まで待ちちゃうんだよね。

それでまた道具を片づけて、机を元に戻して、カギをかけて帰るんだけど、その帰りに前回の講座のことを思い出して〈こう言ったのが悪かったのかなあ〉とか〈あの時にこうしなかったのが悪かったのかなあ〉とかいろいろ考えちゃって、次の月の講座の時に生徒さんが来てくれるまで、すごく不安なんだから」と話した。そうしたら、絵里子ちゃんは意外だという顔をして聞いてくれる。

「教室って、黒板の前で絵の描き方を説明するから、なんとなく格好だけは〈教える人〉って感じだけど、これも生徒が一人でもいるから成り立つんで、生徒さんが一人もいなかったら、説明することもなく、講座も成り立たないでしょ。だから、まずは〈来てくれてありがとう〉で、絵を描いてくれたら〈絵を描いてくれてありがとう、付き合ってくれてありがとう〉って思っているんだよ。

だからさ、もし今の小学校や中学校の先生が、生徒さんを一人一人から授業料をもらってて、生徒さんを自分で募集して集めていたら、授業の仕方とか生徒さんへの対応とか、絶対に変わってくると思うんだけどなあ」と言ったら、絵里子ちゃんは苦笑していた。

ボク自身、キミ子方式で絵を教えることはサービス業だと思っている。一人一人の授業料で生活しているのだから。

そして、授業料をもらいながら、生徒さんが〈何〉に対して苦手と思っているのか、その〈何か〉をみつけ、どうしたら解消できるのかを考えるのが仕事だ。だからこそ、講座の中でボクが学ぶこともたくさんある。そしていつでも、キミ子方式という描き方があるのではなく、目の前の生身の人間に合わせていく、その姿勢こそがキミ子方式なのだと思っている。

「生徒さんがいるから講座が成り立つ」。これもボクは、22 年前から変わらず持ち続けている一つです。

そして、教室に生徒さんが集まってくれて、絵を描き、展示して、生徒さんが帰っていく。そのキミ子方式の教室の中は「みんなが描ける。そして、みんな違うのだけど、どれも（作品も、生徒さんも）魅力的と思える空間」でありたいと思っています。それは、人を評価し、上下の序列をつけていくことが当たり前の教育界の中にあって、上を目指す上下の関係ではなく、左右の関係を広げていくことが、今の時代だからこそ必要だと思っているのです。

上を目指して積み上げて、倒れちゃいそうでしょ。それなら大地に立ち手をつなげるように横につながたら安定するような気がするのですが、どうでしょう？

先日、土曜日の午後のクラスで、一人の小学校 5 年生の男の子が、絵を描き終わったところに、お迎えのお父さんが来てくれました。

その男の子が道具を片付ける間の時間、お父さんは教室の玄関で立って待っているの、ボクが

「すみませんね、もう少しですから、お待ち下さいね。すぐですから」と声をかけると、そのお父さんが

「あっ、大丈夫ですよ。ココのあたたかくて優しい雰囲気が好きなので、待たされても苦になりません」と言ってくくださったのです。

生徒さんだけではなく、そのまわりの方にまで伝わるもの、それがその場の持つ力なのではないか、その場の力とは、その場に集まるひとりひとりの想いが集まったものなのでしょう。

そして、これは私たちからの勝手な思い入れなのかもしれませんが、絵を描いている時にかける言葉。それは描き方ではなく、描くときの心の持ちよう、「過ぎたことはこだわらず、遠い先を憂うのではなく、今の一点に集中する」「一点からとなりへとなりへ」「足りなければ足して、余れば小さくして自分の世界を中心に考える」は、絵を描く時だけじゃなく、〈何か〉に使えるような気がするのです。実際のボクの日々の暮らしの中で、これらを自分に言い聞かせる機会は少なくありません。

そして最終的には、作品を残した自分を「自分ってすごい！」と好きになってもらえたら嬉しいのです。

絵を描いたあと、きっとモデルになってくれた野菜やイカや草花が、今まで見ていたものと、まったく違って見えるでしょう。それはモデルにしたモノとの距離が近づいて、見方が変わったからなのです。そうやって、身近なものを愛おしいと思えたら、なんか平和ですよ。

そういえば、こんな事もありました。

昨年の会社の決算で、お世話になっている会計事務所の担当が離職して、会計事務所の大先生が担当してくれることになり、先生が挨拶もかねてキミコ・プラン・ドウを訪ねてきました。

一通り会社の内容や一年の流れを説明して、打ち合わせも終わって雑談の時です。先生が

「一つ聞きたいことがあるのですが、社長の教室にくる生徒さんは、何を目的で教室にくるんでしょうね。例えば、美大受験の予備校とかなら、合格するという目的があるでしょう。そうやって考えると、ボクみたいな社会システムの一旦で生きている人間としては、どうもスッキリしないというか、なんというか……」と言うのです。

それに答えて

「いや～、生徒さんがどんな目的で来ているのかは、それは人の数だけ違うと思いますよ。絵を描いて昨日の自分よりも今の自分が良くなっていることを喜ぶ人もいれば、クラスメートと共の過ごす時間がたのしいと思う人もいるでしょうし、モデルにした野菜や草花に、新しい発見をして、心豊かになったり……。でもそれは目的っていうのとは違いますよね……」と一緒に考えていると、先生は

「じゃ、社長が考えるこの会社の目的って何ですか？」と聞くので

「それは〈世界平和〉ですよ」と即答しました。

「はっ？ セカイハイワ・・・??？」と、目がテンになってました。それからしばらく黙っていた先生は「まっ、芸術ですからね。そのくらいの方がいいんでしょうな」と笑いながら帰っていきました。

でも、ボクは本気でそう思っています。

絵を描いて、自分のいい所を認めたら、きっと人の良いところも出てくるでしょう。

もともと縦の関係ではなく、横の関係ですから、お互いを認め合えることでしょう。

そして、身の回りにあるものを描いて、その描いたモノを愛おしいと感じる。

そこには争いが入り込む隙がないですね。

キミ子方式が、いや、キミ子方式を支える思想が広がれば、きっと平和になると信じているのです。

◎20周年だからこそ、変えること

最初に「20周年だからといって、これといってイベントをすることは・・・」と書きましたが、あえて変えていこうと考えていることがあります。

◎1つ目 「キミ子方式アートスクール」を「松本キミ子のアートスクール」に変更。

2009年度のアートスクールは、キミ子さんが週に（月）（金）の二日間担当することになり、それに伴ってこれまで20年続けてきた「キミ子方式アートスクール」を、キミ子さんのやりたい事、伝えたい事を中心とした「松本キミ子のアートスクール」に内容を変えます。

これも続けてきたことの良い面でもあるのですが、キミ子さん以外の講師でも、キミ子方式を伝えることができるようになりました。

そこで、キミ子さんだからこそ伝えられることを中心に、キミ子さんが70年の人生をかけて培っている美術の関すること、それは〈絵に対する考えた方〉だったり、一般的な美術全般、美術史や美術教育史、デッサンや修学旅行を含めたスケジュールを考えています。

◎2つ目、作品の展示スペースを開放します

キミコ・プラン・ドウの一階の入って左側の壁面、あとイーゼルを数個くらいの小さな画廊を始めます。そのスペースで小さな個展やグループ（といっても2、3人でしょうけど）展に利用してもらいたいです。

今のところ、キミコ・プラン・ドウの教室に通っている方、通われた方を対象にしています。

作品展に関する用意（個展の案内状作成、出品者のご自宅まで作品を取りに行き、タイトルのプレート作り、作品の展示、搬出まで）は、ボクが責任を持って行ないます。

もちろん、会場費もフリーです。なにからなにまでお膳立てして、会場も無料となると、逆にうさんくさいですね。なので、一つだけお願いします。作品展の案内状の作成（1000枚で¥35000くらい）をして、その案内状の半分をキミコ・プラン・ドウに寄付してもら

いたいのです。そのハガキは、ウチから広報のために毎月約 500 通くらいのダイレクトメールを送っていて、その中に入れさせていただきたいのです。それが唯一の条件です。また、会期中は、一階でお茶でも飲みながら来客を待つことも出来ます。ぜひ、ご一考下さい。

○3つ目、受講料を見直します。

1989 年開設当時から、変わらないことの一つに、受講料があります。その受講料を改訂します。

20 年前、地域にある絵画教室が週 4 回で、ウチの 1 回分の受講料が一般的でした。そこへあえて、キミ子方式は今までの絵画とはちがい、その 2 時間が従来の絵画教室の週 4 回分に当たる価値があると考え設定した価格でした。それから 20 年も続くとは、その当時は誰も思っていませんでした。

しかし、今は違います。これから先、20 年後も同じ内容を提供できるようなビジョンの確立を、さらに確固たるものにするための一歩と考えています。どうぞ、変わらぬおつきあいをお願いします。

◎変わってしまったから、あえて、戻そうとすること

昨年、韓国・晋州の大学で、第一回キミ子方式・日韓交流研究大会を開催しました。日本から 15 名の参加者があって、大会中の講座は、韓国現地の先生や学生が講師をしてくれました。その講座を見学させてもらって、現地の講師たちが、情熱的に教えている姿を目にしました。

もちろん、国が違えば文化も違うので、韓国の方が情熱的にみえるのかもしれませんが、きっとそれは、キミ子方式の情報がないからその不安を打ち消すように、饒舌に勢いをもって講座を動かしているのです。

〈どうなるか予想がつかないから、勢いで進める〉のは、教えるという立場にたったことがある人なら身に覚えがあるでしょうし、ボクがこの仕事を始めた時と同じなのです。そして、その熱に心を動かされ、揺さぶられていました。

おかげさまで、キミ子方式を伝える事を 22 年続けさせてもらって、一番忙しい時は月に 600 人くらいの生徒さんにお付き合いいただき、今でも年間（もちろん累計ですけど）4500 人位の方とお会いします。さすがに、それだけの経験を積み重ねてもらえれば、想定外のことに出会うことも少なくなり、不安を打ち消す勢いがなくても、講座をできるようになっています。もちろんだからといって手を抜いているわけではありませんが、韓国で見た〈熱〉がなくなっているような気がするのです。

今から、知識や経験をなくすことはできないので、20 年前と同じにはなれないのですが、それでも、その最初の頃の事を忘れないように、これからも出会う方から学ばせてもらおうと、決意も新たに、今の一点から明日へ向おうと思っています。

本当に長い手紙になりました。ここまでお付き合いいただきありがとうございます。たまには歴史を語るのはいいかなと思っています。

どうぞ、こんな教室ですけど、これからもよろしくお付き合いいただければ嬉しいです

有限会社キミコ・プラン・ドウ

代表取締役 松本一郎

2009年1月31日

〒153-0041

目黒区駒場4-7-8 リバティールーム

電話 03-3467-3657 / FAX 03-3485-9796

plando@kimiko-method.com

<http://www.kimiko-method.com>